
愛しいくらいに不確定

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しいくらいに不確定

【Nコード】

N8712F

【作者名】

るうね

【あらすじ】

「ごめんなさい」。そう言われると分かっている、僕は彼女に告白した……。

「君が好きだ」

『……ごめんなさい』

彼女に、そう言われることは分かっていた。

僕には予知能力がある。きっかり五分後、自分の身の回りに何が起こるかが、映像として浮かぶのである。

子供の頃から、じゃんけんの勝率は八割を超えていた。相手の出す手が分かるのだ。負けるはずがない。十割でないのは、わざと負けたから。さすがにじゃんけんに全く負けたことがないとなると不自然だろう。そのように子供の頃から聡かったため、僕の予知能力に気づいている人はいない。両親も友人も。

それが理由だろうか。僕は常に他者に対して、壁を作っていたような気がする。薄い、けども決して破れない壁。いつでも一歩引いた目線。

そんな僕が恋をしたのは高校に入学してから。

「楽しくなければ、笑わなきゃいいのに」

そんな風に言われた。

クラス内の親睦を深めようといわれたレクリエーション。そのビンゴ大会。誰が一番先にビンゴになるか、僕にはすでに分かっていた。分かっている、楽しんでるふりをしていた。それを指摘された。

彼女は僕と全く正反対で。何にでも、とりあえず突っ込んでみる。そんな猪突猛進、先のことは考えないタイプ。当然、学級委員長にも立候補した。で、僕を副委員長に引きずり込んだ。

「なんで僕が」

「ん、だって暇そうだったから」

それから、何かにつけ、彼女は僕を巻き込んだ。最初は、ただ鬱陶しいだけだった。それが変わったのはいつ頃だろう。はっきり自覚したのは、彼女が風邪で休んだ時。つまり、そう思った。いつの間にか、僕が作っていた壁は、彼女に壊されていたのだ。

僕は彼女が好きだ。

それを伝えたかった。放課後の教室に、彼女を呼び出した。時間通り、彼女は教室に入ってきた。西日に細めた目を、こちらに向ける。

「なに？ 急に呼び出したりして」

「あのさ」

その時、未来が見えた。

「君が好きだ」

僕は言った。結果が分かっている。もうこの思いを胸に留めることはできそうになかったから。断られてもいい。意味なんて、なくていい。彼女を好きになった。好きになれた。その気持ちが一番大事なんだ。

彼女は、きょとんとした顔。そして、真面目な顔に。

「……ごめんなさい」

僕は目を閉じる。分かっていたこととはいえ、痛みはある。しかし、満足感がそれを上回っていた。

「……なんてね」

悪戯っぽい、彼女の声。目を開ける。声と同じように悪戯っぽい彼女の笑顔。

「好きだよ、私も」

今度は、僕がきょとんとする。なんだこれ。僕の見た未来と違う。混乱する僕に彼女は抱きついてきた。

「うん、大好きかな」

混乱する頭で考える。

そうか。僕が見た未来は途中まで。その先を見ようとはしなかった。いや見れなかったのか？ 全ては僕の行動次第で……。

「ね、ぎゅーっとして」

言われるまま、彼女の背中に手を回す。

温かい。

なんだ。

僕は苦笑する。

未来なんて、愛しいくらいに不確定じゃないか。

僕は、腕の中の彼女を、不確定な未来を強く抱きしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8712f/>

愛しいくらいに不確定

2010年10月10日00時25分発行